



帯広の森50周年記念事業実行委員会
委員長 三日市 則昭

前夜からの雨模様で多少ぬかるんでいる駐車場。スコップを持ち地面を均している男がいる。(プロジェクトX風)

1975(昭和50)年6月1日(日)午前10時、帯広市街地の西部、南の森西側の帯広の森用地で100年の歩みの第1歩が記された。私は帯広の森市民植樹祭実行委員会のメンバーとして、前夜からの雨模様で多少ぬかるんでいる駐車場をスコップで均したことが記憶に残っています。

「みんなで創ろう 帯広の森」。

これは第1回市民植樹祭の標語です。帯広の森は市民の手により造り上げようとの理念のもと、植樹が始まって半世紀が経ちました。現在、帯広の森を歩くと、立派に育った木々の姿や、アズマイチゲ、ユキザサやオオバナノエンレイソウ等の林床植物、エゾリスやエゾタヌキ等の小動物、オオタカやシマエナガ等の鳥類、ベニシジミやキアゲハ等のチョウ類に出会うことができます。

これまでになるには、30回延べ14万8500人の参加者の手による植樹祭、15回延べ1万3000人の汗が木々を育てた育樹祭、8団体のボランティア団体等による森の育成、これらがまさに「市民が自ら創り育てる」帯広市の文化へと昇華させたといっても過言ではないと思います。

帯広の森の出発点は帯広市第5代吉村市長が1959(昭和34)年に策定した「帯広市総合計画」に始まります。その計画の一部を抜粋します。

— III 計画の目標 1. 基本的目標
『…こうして明るく豊かな住みよい帯広市—近代的田園都市—の建設をはかるとともにこれと一体的な関係にある十勝地域ならびに補強的な関係にある道東地域の発展に寄与しようとするのである。』

その総合計画の都市計画の章

— (3) 公園及び緑地 C. 緑地 (b) 緑地帯
『都市計画用途地域の周辺部に緑地帯を指定するとともに、帯広川畔の風致地区を存置するようはかる。』

と記載されており、市街地外縁部の緑地帯が種子(帯広の森構想)の土壌シードバンク(埋土種子)となり、土壌中(緑地帯の計画)で発芽する時期(吉村市長の思い)を吉村市長は心に秘めながらその時を探っていたのではと思います。

その後、吉村市長はウイーンの訪問等を踏まえ緑地帯の姿を帯広の森へと発芽させることを決めました。1971(昭和46)年「第二期帯広市総合計画」で市民ぐるみで推進する主要な施策として、行政主導から行政・市民の協働による帯広の森づくりが具現化されていきます。(同封のDVD 帯広の森20周年誌:詳記)

その考えは歴代市長にも受け継がれ、市民の財産として育てられ、帯広の森はゆるぎなく行政・市民により歩みを進められています。

しかし、まだ自立した森への道のりは長い月日が必要です。「みんなで創ろう」の原点に戻り、多くの市民が参加することを期待します。まずは帯広の森を身近に感じていただき、森の空気や香りをまといに行ってみてください。そして、これからの50年で帯広の森を取り込む市街地風景と、帯広の森から続く日高の山並み間の農村風景が、市民の誇れる帯広の原風景となるように創って行ってください。

1959(昭和34)年から2024(令和6)年、この間に森づくりに携わった多くの人々に感謝申し上げ、また、これからの50年を創っていく皆様に哀願し50年の節目といたします。

記念誌発刊によせて



帯広市長
米沢 則寿

日本が高度成長の最中にあった昭和45年、吉村市長の提唱から始まった帯広の森構想は、先人たちが開拓した大地に再び木を植え、育てた森で街を包み込むことで、人間社会と自然環境の調和をはかり、緑豊かなまちをつくるという時代を先取りした壮大なプロジェクトです。

前例のない中で、「100年後、200年後に夢を託し、新しい歴史をつくりだす母なる森」の実現を目指して、市民と行政が一体となり、試行錯誤を積み重ね、様々な課題を乗り越えてきたこの一連のプロセスは、不確実性が高く、将来の見通しを立てづらい今の時代を乗り越えていくモデルにもなり得ると思います。

昨年、市民植樹祭により帯広の森づくりが始まってから50年の節目を迎えました。市民団体の皆さんなどで構成される実行委員会を中心に、半世紀に及ぶ森づくりを振り返りながら、現在地を確認し、未来へつないでいくために、様々な周年事業が実施され、多くの市民の皆さんにご参加いただきました。

5月には、記念植樹・森づくりの集いが開催され、私も帯広の森で3回目となる植樹をしました。前回は、平成23年に開催された北海道植樹祭で、最初の植樹は、その前年、私が市長に就任した年の5月になります。帯広の森・はぐくむのオープン記念として、田本憲吾さん、高橋幹夫さん、砂川敏文さん、そして、森の少年隊の子どもたちと一緒にエゾヤマザクラを植えました。

このとき、歴代の市長をはじめ、多くの市民の皆さんによってつくられてきた「帯広の森」という伝統と文化をしっかりと受け継ぎ、誰からも愛され、親しまれる市民の森となるように尽力していくと誓ったのを今も覚えています。

それから14年、初夏を思わせるような、十勝・帯広らしい青空のもと、森の中から掘り取ってきた苗を植え、森の成長に支障となる外来種（チョウセンゴヨウ）の稚樹の抜き取りを行いました。

イベントには、多くの子どもの参加し、これまで森づくりに関わってきた方々の指導を受けながら作業にあたっている情景をみて、森づくりが確実に受け継がれていることを実感しました。

9月に開催されたシンポジウムでは、基調講演やワークショップなどを通じて、市民の皆さんの思いやパワー、そして、皆さんと一緒に50年の歳月をかけてつくりあげてきた森の価値と50年という歳月をかけなければ到達できないアドバンテージともいべきものを改めて感じ、帯広の森は自らの手でつくりあげた「まちの誇り」として、これからの稀有な存在であることを確信しました。

現在、帯広の森では、散歩やジョギングをする人、草花や野鳥を鑑賞する人、体育施設や交流館を利用する人、冬にはクロスカントリーを楽しむ人など、それぞれが心地よい憩いの「時」を過ごしています。

ここに暮らす人たちの日常には森との接点があり、その風景は、文化や豊かさを象徴するものです。様々な人が森に関わることで、森の価値もさらに高まるように思います。

この森が皆さんの日常と重なり、森の中で、仲間や家族と緩やかに流れる時間を過ごすことで、一人ひとりの幸せにつながっていく、そんな未来を想像しながら、100年に向けて、森づくりに取り組んでまいります。

ぜひ、皆さんも帯広の森へ足を踏み入れて、“皆さん一人ひとりにとっての帯広の森”を見つけてください。